

大学

アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2025.3.31 No.72

Japan Association of College and University

Archives : Eastern Japan Division

目 次

・ 浅沼薫奈「2024年度全国総会講演会および研究会に参加して」	1
・ 上野平真希「2024年度全国研究会見学会に参加して」	3
・ 廣瀬公彦「第140回研究会（於、東京学芸大学）に参加して」	5
・ 阿部裕樹「パルテノン多摩の「市民学芸員」についてのご講演を聞いて ——全国大学史資料協議会東日本部会第141回研究会参加記」	7
・ 全国大学史資料協議会2024年度全国役員会議事録	9
・ 全国大学史資料協議会2024年度全国総会・全国研究会記録	9
・ 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録	12
・ 全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録	14
・ 全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿	15

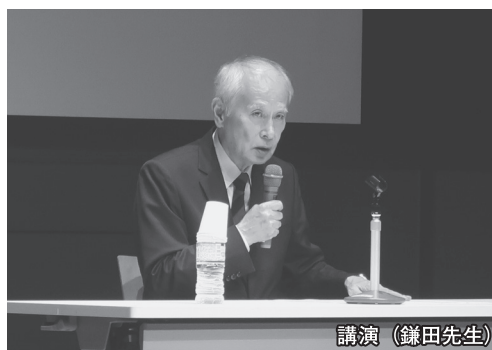
2024年10月2～4日（水～金）全国総会・研究会・見学会

2024年度全国総会講演会および研究会に参加して

大東文化大学 浅沼薫奈

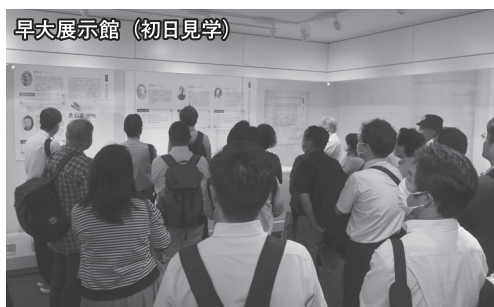
初日の全国総会講演会は、独立行政法人国立公文書館館長・鎌田薫氏（早稲田大学第16代総長、同名誉教授）より「アーカイブズの現在とこれから」と題して行われた。まず国立公文書館の目的や沿革説明がなされ、2011（平成23）年に施行された公文書管理法を機として発展した経緯について語られた。また、同館所蔵資料紹介および利用公開に関する説明においては国立公文書館の認知度は意外に低いこと、実態として国民利用は1%未満にとどまっているという現状につい

ても言及があり、これは公文書が「国民共通の知的資源」である点についての歴史的理解に基づく認知が広がっていないことが要因で



講演（鎌田先生）

あるとされた。現在、国立公文書館では展示や教育支援に力を入れて国民からの理解を深め認知度の向上を図るとともに、デジタルアーカイブの活用を進めて利便性を高めることにも取り組んでいる。一方、国立公文書館では同館長が専門人材としての認証を行う「認証アーキビスト」「准認証アーキビスト」の育成や定着にも取り組んでいる。ただ、アーキビスト養成プログラムが設けられている大学院自体の数がまだ少ないうえ資格取得には研究能力や実務経験が必要とやや高いハードルとなっているため、積極的な取得とまでは至っておらず、地方を含めた公文書管理部局に関係する人々を中心として資格取得を目指して欲しいとのことであった。確かに公文書管理の重要性に関する意識を高めるためにも資格取得は一つの目安として捉えやすく、認証アーキビストが文書管理に携わる公文書館が望ましいと思う。講演後半には大学アーカイブズと大学史編纂事業についての課題に触れられたが、講演内容を通じて編纂事業と歴史資料の取り扱いおよび文書管理とが乖離することなく適切な保管が徹底されていくことは今後の重要な課題であると感じた。



早大展示館（初日見学）

翌日に開催された2024年度全国研究会のテーマは「年史編纂の現在地」と題し、早稲田大学小野記念講堂において、西山伸氏（京

都大学）の司会のもと、長谷川倫子氏（明星学苑）、藤岡健太郎氏（九州大学）、戸邊秀明氏（東京経済大学）の順で報告が行われた。



長谷川氏は「学苑・大学企画局 学苑連携推進ユニット」に所属されており、職員としての立場で百年史編纂に携わることとなり、「年史編纂を終え」た所感とともに企画段階から編集体制まで、その過程や残された課題を報告された。100周年事業全体を把握しマネジメントする立場にあって、周年事業の一つとして『明星学苑100周年記念誌』の編纂に携わった。最終的に冊子体および電子ブックの「沿革史」編纂と、特設ウェブサイト上公開の「100人インタビュー」企画が実施されたが、卒業生・在校生を問わず、小学生から大学生まで活躍する明星学苑関係者全体を巻き込んだ記念事業は、既存の「年史編纂」の枠にとどまらない可能性あふれる試みであると感じた。

藤岡氏は「大学文書館」に所属される専任教員であり、九州大学百年史編纂における実質的な責任者としての立場から、印刷物ではなく電子媒体のみで公開した初の大学沿革史編纂に臨まれた経験が報告され、WEB編纂と公開における準備過程と生じた課題等について詳細に語られた。写真集のみ電子媒体だけでなく印刷冊子も作られ配布されたもの

戸邊氏は学部にも所属される教員として百二十年史編纂に関与することとなった。専門的な知識を有する研究者数人を通史執筆のため招聘し行われた同大の本格的な沿革史編纂は、120年目にして初の試みであった。同大におけるこれまでの年史編纂の試み、関連事業の概要等とともに、長期にわたる空白期間のために生じた資料散逸と、編纂のために改めて資料を収集されていく過程についても報告された。「周回遅れ」とへりくだった表現で自己評価をされていたが、大変に質の高い資料編を二冊刊行され、現在は通史の刊行に取り組まれている。編纂体制から近年までの蓄積された研究成果を存分に活用しながら

らの年史編纂は上質な沿革史となると予感された。

瀬戸口龍一氏（専修大学）からのテーマ発題にもあったように、日本における近代的大学の創設から 150 年を超えた現在、多くの大学で年史編纂が行われている最中である。1980 年前後には「100 年史編纂ブーム」が見られたが、半世紀近くの時を経て、現在は明治初年に創設された学校群の 150 年史と 1920 年代に創設された学校群の 100 年史とが混在し、さらに大きな「編纂ブーム」が起きているようである。また、従来多く見られた重厚な箱入りの沿革史だけでなく、紙媒体として刊行されると同時に電子媒体としても閲覧されることを想定しつつ編纂を進める大学も多い。刊行形態も多様化が進み、通史、資料編、写真集だけでなく、自校史教育用に小史やブックレット、漫画で読めるようにするなど多くの大学で独自の工夫が見られるようになってきている。

さまざまな試みの経験を大学間で共有しつつ、多様性のある沿革史編纂の在り方を追究していく重要性をあらためて感じた、実りある全国研究会であった。

2024年度全国研究会見学会に参加して

日本大学 上野平真希

全国研究会3日目の10月4日（金）、東京都国分寺市の東京都公文書館において見学会が開催された。同館は令和2（2020）年4月に、仮移転先の旧都立玉川高校校舎から本格的に移転して業務を開始したとことで、比較的新しい建物である。床や壁だけでなく、閲覧室の机や休憩コーナーのベンチに

も統一感のある木材が使われたデザインで、「無機質」な公文書館ではなく、木のぬくもりが感じられ、親しみやすい空間であることがまず印象に残った。

最初に、同館の西木浩一氏による講演「東京公文書館の沿革と所蔵資料 明治・大正期の学校関係文書」を拝聴した。同館の概要

及び所蔵資料についての概要説明の中で、明治35年に始まった東京市史編さん事業に端を発し、歴代の市史編さん担当者たちの熱意によって、戦争等のいく度かの危機を乗り越えて貴重な公文書が現在まで引き継がれてきたという話があった。実は、私は一度だけ利用者として東京都公文書館を訪問したことがあったのだが、その際には目的の資料を閲覧したのみで、東京都の古い史料や現在の公文書を保存・管理・閲覧できる館である、という一般的な概要しか知らなかった。よって、どのような成り立ちで館が出来、現在に至るのかについて講演で詳しくお話下さったことで、自分が史料を利用させていただける環境が貴重なものであることをより一層感じられ、先人の努力へ感謝するとともに、改めて現在自分が職場で扱っている史資料が将来に適切に引き継げるように業務にあたりたい、と思いを新たにしました。



講演の後は3つの班に分かれ、館内を見学させていただいた。私は最初にバックヤードを見学する班であった。来館者用のエリアを出て書庫のエリアに入った瞬間、がらりと雰囲気が変わったことに驚いた。というのも、それまでの木材を多用した空間から一転して、真っ白な空間であったためである。壁も

床もすべて真っ白の理由は、害虫が出た際に視認しやすくするためとのこと。粘着シートで靴裏の汚れを取り、さらにスリッパに履き替えて再度粘着シートで靴裏の汚れを取ってようやく入った書庫は、空調が効いて清潔な空間であった。新しい施設だけあって、バックヤードの書架にはまだゆとりがあるように感じた。ここでは書架の棚の大きさに合わせてつくられた保存箱の中を見せていただいたり、保管されている所蔵資料の中から、見学に参加している大学に係る公文書（私が参加した班では、明星学苑と帝京大学）が綴られている簿冊の現物を見せていただいたりした。講演で大学史に関する資料を紹介して下さった上に、バックヤードでは見学会参加校に関する簿冊の現物をいくつも出して下さるという公文書館の担当の方々のお気遣いを感じた。便利なことに、近年はデジタル化が進んでおり、最初から資料をデータで閲覧することが可能である。場合によっては、館を訪れることなく、オンラインのみで事足りることもあるし、私も日々、デジタルデータを利用させていただいている。一方で、現物を見ることによって初めてわかる情報もある。よって、最近ではなかなか直接見る機会が減ってきた実際の簿冊を見て雰囲気を知ることが出来る貴重な機会となった。

次に見学したのは、展示コーナーである。展示は大きく分けて「東京の軌跡」と題した東京都の歴史に関するコーナーと、企画展のコーナーとに分かれていた。企画展では、今年7月から新札が渋沢栄一・津田梅子・北里柴三郎に切り替わったということで、彼らに関する所蔵資料が展示されていた。通常はデ

デジタル閲覧になるであろう重要文化財指定の公文書を、ガラス越しとはいえ、気軽に、無料で見るができるというのは貴重な機会であろう。展示している資料の各キャプションに請求番号が明示されているのは、展示資料に興味を持った人が実際に資料を請求して閲覧するきっかけになるかもしれないので、良い取り組みだと感じた。また、公文書の教育普及のための展示であるが、公文書館が多摩地域にあるということもあり、多摩に関する情報を意識的に入れているという点も面白く拝見した。



3日目見学会全体（東京都公文書館）

最後に閲覧室を見学させていただいた。東京都公文書館はマイクロフィルムのデジタル化が進んでおり、資料情報をパソコンで検索し、そのまま請求することができるし、さら

に申請すればそのままパソコン上で閲覧し、その場でプリントアウトまでできるという、ワンストップ化が実現されていた。地図や図面等の大型資料についても順次デジタル化が進んでおり、これらについては、来館することなく、高精細画像をオンラインで閲覧でき、しかも画像の保存も可能とのことである。いずれの取り組みも、実現までには多くの検討を重ね、大変な苦労があったことと推察するが、利用者目線では非常に便利に感じた。

見学会を通じて、100年以上にわたり担当者たちが継続して資料を守り、保管してきたからこそ現在私たちが貴重な資料を使えるそのありがたさと、資料を継承していくという業務の大切さを改めて実感した。同時に、長期にわたる活動の中で、組織が変わり、時代の要請が変わり、資料保管の技術や人々の意識が変わってきたからこそその難しさも感じる。資料の保存・公開の在り方は、技術の進歩や社会の在り様によって今後も変わるであろうが、「未来にしっかりと引き継ぐ」という根幹を忘れず、今後も業務に当たりたいと思う。

2024年12月5日（木）研究会

第140回研究会（於、東京学芸大学）に参加して

北海道大学大学文書館 廣瀬公彦

2024年12月5日（木）、東京学芸大学を会場として、第140回東日本部会研究会が開催された。

研究会では、まず、大学史資料室副室長の君塚仁彦氏より、「東京学芸大学大学史資料

室の設立と展開」として、大学史資料室の歩みを紹介する講演があった。

大学史資料室は、2009～2010年度の学内資料調査を起点とし、2012年4月に開設された。講演では、開室記念セレモニーにて

上映したという、学内資料調査の報告スライドが映写された。



スライドには、学務課・人事課・施設課・屋外文書保管庫・附属図書館文書保管庫等に残されていた歴史的資料を調査した際の写真が掲載されており、古い簿冊や刊行物がスチール棚や段ボールに収められている様子をうかがうことができた。アーカイブが整備される以前の文書管理状況の記録として、興味深く拝見した。

中でも特に印象的だったのは、屋外文書保管庫内で、きちんと年代順に排列されていた古い簿冊の写真であった。その並び方は、それらの簿冊が偶然に残ったのではなく、事務職員が重要なものと考えて意図的に保存しようとしたことを示していると、君塚氏より解説があった。

また、図書館内の文書保管室にて、50年史編集時に収集した資料を収めた段ボールに「重要 捨てるな（歴史的）」と記されている写真もあった。

大学の歴史的資料を保存する組織のなかった当時であって、排列を整え、箱に注意書きをして後世に残そうとした痕跡は、大学史資料室の意義を強く実証するものと感じた。

続いて、大学史資料室専門研究員の牛木純江氏より「東京学芸大学大学史資料室の活動」

として、資料室の施設・設備、資料の整理と公開、常設展示、学部教育との連携について紹介する講演があった。

常設展示は、毎年4～12月を3期に分け、2年サイクルで実施している。つまり、6種類の展示が3ヶ月ごとに入れ替わり、2年ごとに繰り返される仕組みになっている。

この仕組みは、学生の来室を促進する取り組みであると感じた。大学史資料室は附属図書館3階に位置しており、学生の身近にある。常に同じ展示を公開するのではなく、期間を限定して変化を持たせることにより、足を運ぶきっかけになっているであろう。2年周期というのも、在学中に同じ展示を再度目にしうる間隔としてほどよい。学年が進むと、資料の見え方にも変化があるかもしれない。

学部教育との連携では、2020年度以降、博物館実務実習の実習生を受け入れているとのことであった。コロナ禍で外部への実習が難しくなったことで始まった取り組みで、キャンパスツアーの動画作成や常設展示の企画・作成をおこなっている。

その他にも、資料整理のアルバイトを学内で雇用するなど学生の参加がさまざまみられる。一方で、自校史教育がカリキュラムに組み込まれていないというお話を伺った。『東京学芸大学 150年の歩み 1873-2023』（学



文社、2023年6月）が刊行されたが、1年生向けの授業を担当する教員が用いる場合もあるという程度に留まっているらしい。

自校史の教材として、大学史資料室が2018年に刊行した『東京学芸大学大学史テキスト』もある。1ページごとに資料1点程度と解説文を掲載する、読む資料集といった構成である。漢字カタカナ交じり文に触れる機会として、あるいはキャンパスの移ろいを

意識するきっかけとして、さまざまに活用できるテキストだと感じた。

その後、大学史資料室の閲覧・常設展示スペースと、附属図書館内の収蔵庫を見学した。アーカイブズ組織の設置に至るまでの経緯や、コロナ禍にあって活動を拡張していく取り組みなど、学ぶことの多い有意義な研究会であった。会場校の皆さま、運営に携わった皆さまに厚く御礼申し上げる。

2025年1月23日（木）参加記

パルテノン多摩の「市民学芸員」についてのご講演を聞いて ——全国大学史資料協議会東日本部会第141回研究会参加記

明治大学史資料センター 阿部裕樹

2025年1月23日（木）、東京都多摩市のパルテノン多摩で本会第141回研究会が開催された。前半は、パルテノン多摩ミュージアム学芸員の橋場万里子氏による「パルテノン多摩ミュージアムのリニューアルと市民学芸員との協働～地域文化のすそ野を広げる～」と題する講演会、後半がミュージアム見学（企画展「多摩市百草恋路稻荷神社の秘密——古墳の上の神社の伝来資料群と黄檗寺院「資福院」の痕跡」、回廊展示「絵図のなかにわたしたちの街の江戸時代を探す——多摩市の丘陵どまんなか編」、常設展示）であった。

筆者が感じた橋場氏の講演のキーワードは「市民学芸員」である。ここでいう「市民学芸員」という名称は、全国の博物館等で「ボランティア」、「サポーター」、「友の会」、「〇〇隊」といった名称で活動する、博物館の正規スタッフではない一般の方がたの組織と同

義である。橋場氏の講演の多くは、この「市民学芸員」と関係する内容であった。

講演ではまず、多摩ニュータウン造成前後の歴史と、多摩ニュータウンの特色について説明があった。多摩丘陵を切り開いて、かつての農村が日本最大規模の都市開発の舞台となったことを多くの写真とともにご紹介いただいた。ニュータウン内への入居は1971年から始まったそうだが、しばらくは「新旧住民の融合」がおもな課題であり、1987年のパルテノン多摩開館以降は、橋場氏がおっしゃる「多摩ニュータウンの歴史化」、つまり多摩ニュータウン自体が再開発に伴って姿を変えたり、住民の移動・世代交代があるなかで、ニュータウンに暮らす人びとが育ててこられた文化等の検証と継承などが課題となったとのことである。

次に、2022年のパルテノン多摩リニュー

アル以降の諸活動について詳細な説明があった。その中心が「市民学芸員」の発足とその活動であった。「市民学芸員」を置く目的は、「自ら街の魅力を発見できる市民」を養成すること、「地域に愛着をもち、地域のさまざまな魅力をつなげる存在」の養成を通じて、地域まると博物館構想を実現させ、最終的にはその活動が地域アイデンティティを醸成することにつながるようにすること、「博物館のプレーヤー」としてさまざまな柔軟な企画を提案・実施し、博物館の敷居を下げ、博物館に多様性をもたらす存在を養成すること、であるという。筆者（阿部）は、「地域まると博物館構想」という表現にあるように、博物館活動の幅を大きく広げることが期待しての試みであると感じた。その活動は、「街角アート」、「トレーディングカード制作」、「（東京五輪ホストタウンをきっかけとする）アイランド企画」、回廊展示の企画・実施等、たしかに多様である。橋場氏によれば、実現しなかった（趣旨に合わなかった）企画もあったというが、正規スタッフでは発想できないような企画に出会うことは、たとえ実現できなくても、それ自体に刺激があり、業務の広がりにつながる可能性があるように思う。そして、筆者が最も興味を持ったのは、企画が固定化しないよう「市民学芸員」には時期を定めて活動してもらうという工夫である（ただし、当初設定時期の終了後も、引き続き関わってもらえるような仕組みはあるとのこと）。2022年スタートで歴史が浅いため、顕著な結果（効果）が見えてくるのは先のことと思うが、長く続いてほしいと思う。なお、別に年限の無い「市民研究員」（おもに、ミュー

ジামの資料収集・保管、調査・研究に関わる）という組織もあるとのことである。

講演の最後には、参加者からの質問があり、「市民学芸員」の構想が橋場氏ら現場から生まれたことや、「市民学芸員」の年齢・男女比などについて説明があった。

後半の展示見学では、多摩ニュータウン内で発掘・収集されたさまざまな史資料を実見することができた。考古学、民俗学、歴史学など多方面にわたる内容で、毎回のことはあるが、パルテノン多摩のように地道に活動続ける地域博物館には、改めて敬意を表したい。

最後に筆者の私見を述べたい。本会会員の多くは、大学史・大学アーカイブを担う機関・部署である。我われにとって、パルテノン多摩の「市民学芸員」に相当する担い手としては、学生、卒業生、一般市民が想定されよう。このうち、学生については、否が応でも入れ替わりがある。その点では、もし大学史・大学アーカイブの活動に学生が関わってもらえるような仕組みができれば、毎年のように目新しい活動を展開できるかもしれない。もちろん、学生に対する教育的効果もあるだろう。今回の研究会は、こんなことを考えるきっかけになった。ご多用のなかで講演くださいました橋場氏と、準備にあたった幹事各位に御礼申し上げたい。



全国大学史資料協議会

日 時：10月2日（水）12：30～13：00

会 場：早稲田大学早稲田キャンパス 小野
記念講堂

出席：（東日本部会）神奈川大学 國學院
大學 淑徳大学 専修大学 帝京大
学 東海大学 日本大学 武蔵野美
術大学 明治大学 早稲田大学（会
場校としてオブザーバー参加）

(西日本部会) 大阪女学院 大阪大
学 関西大学 関西学院 同志社大
学 広島大学 桃山学院 立命館

議 事

(1) 2024 年度総会・全国研究会の運営について

- ・事務局である専修大学から3日間の詳細なスケジュール説明の後、幹事校各校の役割分担についての確認を行った。

(2) 2024年度の東西両部会の共同事業について

- ・2024年度の事業計画書（案）および共同事業について、東日本部会分については事務局である専修大学から、西日本部会分については庶務校である立命館から説明がなされた。

(3) その他

・東日本本部会の会計校である東海大学より今年度刊行する叢書の支払い方法が変更となった旨の説明があった。

- ・東日本部会の会長校である日本大学より参加費について、情報交換会開催の可否を含めて再検討してはどうかという意見が出され、今後、東日本・西日本両部会においてそれぞれ検討していくことで了承を得た。

- ・西日本部会の同志社大学・大阪大学より総会・全国研究会の日数および日程について、変更を含めて再検討

してはどうかという意見が出され、今後、東日本・西日本両部会においてそれぞれ検討していくことで了承を得た。

- ・西日本部会より来年度の会場については関西圏の大学を候補としている旨の報告があった。

- ・全国大学史資料協議会の会長校の交代（同志社大学から日本大学へ）について確認がなされた。

全国大学史資料協議会

2024年度全国総会・全国研究会記録

総 会 10月2日(水) 14:00～14:30

会 場 早稲田大学 早稲田キャンパス 小
野記念講堂 (27 号館地下 2 階)

出 席 東日本部会機関会員 25 同個人会
員 6 同委任状提出機関会員 20
同個人会員 12

西日本部会機関会員 15 同個人会
員 1 同委任状提出機関会員 15
同個人会員 8

議長 米山建壹氏（多摩美術大学）

副議長 土屋あゆみ氏（大阪女学院）

議 題

(1) 2024 年度役員会の報告について

東日本部会事務局・専修大学より役員会の報告がなされた。

(2) 2024 年度東・西日本部会事業計画報告

東日本部会事務局・専修大学および
西日本部会庶務校・立命館より報告
がなされ、全会一致で承認された。

(3) その他

会場からの質問などはなかったが、最後に東日本本部会事務局・専修大学より来年度の会場校について、西日本本部会では現在、関西圏の大学を会場として検討している旨の報告がなされた。

記念講演会

日 時：10月2日（水）14：50～16：00
会 場：早稲田大学 早稲田キャンパス 小
野記念講堂（27号館地下2階）

出 席：（東日本部会のみ）お茶の水女子大
学 学習院 神奈川大学 関東学院
國學院大学 相模女子大学 自由学
園 淑徳大学 女子美術大学 聖路
加国際大学 専修大学 大東文化大
学 拓殖大学 多摩美術大学 帝京
大学 東海大学 東北学院 獨協学
園 日本女子大学 日本大学 法政
大学 武蔵野美術大学 明治大学
明星学苑 早稲田大学 金光麗湖
北村和夫 谷嶋美和乃 林慎一郎

会場校挨拶・講師紹介 真辺将之氏（早稲田
大学歴史館 館長）

講演者 鎌田薫氏（国立公文書館館長・学校
法人早稲田大学前総長（第16代）

「アーカイブズの現状とこれから」

〔概要〕2024年度全国総会后、「年史編纂の
現在地」を大会テーマとした記念講演と
して、国立公文書館館長・学校法人早稲
田大学前総長の鎌田薫氏より、国立公
文書館の概要とその活動意義および大
学における文書管理とアーカイブズにつ
いての講演がなされた。同館の設立から
現在に至るまでの沿革とその業務の説明
に続いて、公文書管理と公文書館の意義
や課題を含めた将来的な構想について述
べられた。また、大学における文書管理
の実情について国立大学法人の事例を
紹介しつつ、年史編纂を主な契機とする
という点で、公文書管理法の基本理念と
は異なる側面を有する大学アーカイブズ
の独自性や特異性について、大会テーマ
に則しつつ所見を述べられた。なお講演
後の見学会および情報交換会の場におい
ても、鎌田氏には参加会員より熱心な質
疑が交わされた。

（東海大学 椿田卓士）

見学会

日 時：10月2日（水）16：10～17：00
会 場：早稲田大学歴史館（早稲田大学早稲
田キャンパス）

展 示：特別展「早稲田大学と北京大学－
1882-1921－ 早稲田に学んだ近
代中国の先駆者たち」

情報交換会

日 時：10月2日（水）17：10～18：30
会 場：大隈ガーデンハウス（早稲田大学早
稲田キャンパス）

全国研究会

テーマ：年史編纂の現在地

日 時：10月3日（木）10：30～16：30
会 場：早稲田大学 早稲田キャンパス 小
野記念講堂（27号館地下2階）

出 席：（東日本部会のみ）大妻女子大学
お茶の水女子大学 神奈川大学 関
東学院 恵泉女学園 國學院大学
国士館 相模女子大学 自由学園
淑徳大学 女子美術大学 聖路加国
際大学 専修大学 大東文化大学
拓殖大学 多摩美術大学 帝京大学
東海大学 東京経済大学 東邦大学
東北学院 日本獣医生命科学大学
日本女子大学 日本大学 法政大学
武蔵野美術大学 明治大学 明星学
苑 立教大学 早稲田大学 金光麗
湖 北村和夫 古俣達郎 谷嶋美和
乃 西山伸 林慎一郎 山田兼一郎

テーマ発題 専修大学

第1報告 長谷川倫子氏（明星学苑）

「年史編纂を終えて－企画・編集からみた年
史編纂－」

〔概要〕第1報告は明星学苑（学苑・大学企
画局学苑連携推進ユニット）の長谷川
倫子氏による「年史編纂を終えて－企
画・編集からみた年史編纂－」であった。
2023年に明星学苑は100周年を迎え
『明星学苑100周年記念誌』が編纂さ

れた。報告では学苑の沿革に触れつつ、編纂前史として、2010年に明星大学明星教育センターの設立、2014年に『明星大学創立五十周年記念誌』刊行・「明星資料展示室」の開設があったことを紹介。そして2019年に『記念誌』編纂が企画され、翌年に執筆準備に取りかかるが、当時は自校史研究を担当する部署がなく、明星大学明星教育センターが担うこととなった経緯を説明した。編纂時の課題としては『創立六十周年記念誌』以降の40年の歴史が纏まっていなかったことや、学校史としての客観性を担保することなどが示された。また当初は2種の冊子として計画されていたが、1冊のみとなったため、特設ウェブサイトや展示パネルの制作へと展開したことを述べた。

(國學院大学 渡邊卓)

第2報告 藤岡健太郎氏(九州大学大学文書館)

『九州大学百年史』のWEB編集と公開

〔概要〕藤岡氏の報告は、「1. 編集体制の準備」「2. WEB編集」「3. 『九州大学百年史』の公開」の三部構成であった。報告では、「紙の印刷物ではなく電子媒体で公開された日本で最初の大学年史」である『九州大学百年史』の編集・公開の過程と、そこにおける苦労話などが語られた。具体的には、当初の予定では、編集から公開までを1つのシステムでできるようにする予定であったのが、既存のシステムでは対応できず編集と公開を分離したこと、九大の事務で使用していたサイボウズ・ガルーン3のシステムを利用したものの、エディターを組み込めず、文章の作成・編集はWordで行なったこと、などである。藤岡氏はWEB編集・公開の意義として、コスト削減やネット上でいつでもどこでも閲覧できることなどをあげるとともに、WEBだけでは存在自

体に気づかれない可能性があるため、WEB公開を主としても印刷物は作るべきであると述べていた。

(神奈川大学 田中智子)

第3報告 戸邊秀明氏(東京経済大学)

「商業系私立大学史編纂の意義と課題ー「東京経済大学120年史」編纂を通じてー」

〔概要〕第三報告は東京経済大学の戸邊英明氏から「商業系私立大学史編纂の意義と課題ー「東京経済大学120年史」編纂を通じてー」と題した報告が行われた。東京経済大学の沿革と同大学のこれまでの編纂物を紹介し、100年史では、本編は未刊行でビジュアル版小史のみの刊行であったという。また、これまで年史編纂を躊躇させた理由として、3度の資料散逸(関東大震災、空襲、校地移転)を挙げた。

現在、編纂中の120年史は、資料編1・資料編2をこれまで刊行し、今後、通史編と簡易版の刊行を予定。近代史研究者・他大学大学史編纂経験者を嘱託として採用し、執筆体制を確保しているという。編纂の課題としては、官公立高商史に比して私立商業学校史・高商史研究の相対的遅れがあるという点、多摩地域に立地する大学として、地域史の中で大学史を位置付ける必要があることなどを指摘した。

(日本大学 松原太郎)

総括討論

司会兼コメンテーター 西山伸氏(京都大学大学文書館)

〔概要〕総括討論では最初に司会兼コメンテーターの西山伸氏(京都大学)より4つの問題が定義された。①アーカイブズと編纂は別だというのがアーカイブズが編纂の体制にどのように関わっていくのか、②電子媒体はコストや文量の面でメリットがあるはずなのに普及しないのはなぜか、③一体何のために沿革

史を作るのか、④誰が書くのかというもの。この問題に対して各登壇者からは、①アーカイヴズは編纂の中心にならずに編纂室を立ち上げて人員を雇った、②完成した時の周知がうまくいかなかった、出版社を通さないとどうしようもないのでやらなかった、③学生や卒業生に自分たちの大学のアイデンティティを持ってもらうために作った、④現役の教職員が書いたなどの答えがあった。また会場からは、PDFの保存体制はどうしていくのか、電子文書が増えてくるがどうしていくのか、学問史の視点はどういう軸を持って編纂していったのかなどの質問があった。最後に西山氏が「年史編纂がこうあるべきということは思っていない。各大学が様々な条件の中で全力を尽くしている。これから出る年史を楽しみにしている」と語り、総括討論は終了した。

(阿久津朋子)

見学会

日 時：10月4日（金）10：00～12：00

会 場：東京都公文書館

出 席：（東日本部会のみ）お茶の水女子大学 神奈川大学 関東学院 国士館 相模女子大学 女子美術大学 淑徳大学 専修大学 大東文化大学 多摩美術大学 帝京大学 東海大学 東邦大学 東北大学 獨協学園 日本大学 法政大学 武蔵野美術大学 明星学苑 明治学院 明治大学 早稲田大学 金光麗湖 古俣達郎 谷嶋美和乃 檜皮瑞樹

解 説：西木浩一氏（東京都公文書館統括課長代理（史料編さん担当））

見 学：東京都公文書館内の閲覧室・書庫・展示室

〔概要〕見学会は東京都公文書館を会場として行われた。まず、研修室にて東京都公文書館の西木浩一氏より「東京都公

文書館の沿革と所蔵資料—明治・大正期の学校関係文書—」と題して、東京都公文書館の沿革・概要とその所蔵資料についての講演が行われた。大正7年（1918）の大学令の発布とかかわって、見学会に参加したいいくつかの大学に関する資料の紹介などもしていた。講演後、参加者45名を3つの班に分け、展示室・閲覧室・収蔵庫の見学を行った。展示室では、江戸時代から現在の首都東京に至る歴史の流れと主な出来事を紹介した常設展について説明を受け、また9月21日から10月15日の開催期間であったミニ展示「所蔵資料でみる新紙幣の偉人たち」を見学した。このミニ展示は、7月3日に発行された新紙幣の顔となった渋沢栄一・北里柴三郎・津田梅子の父津田仙の3人を、公文書館所蔵資料を通して紹介する内容であった。閲覧室では、パソコンによる資料の検索方法やマイクロフィルムの利用、デジタルアーカイヴズの状況などについて説明があり、収蔵庫では国の重要文化財に指定された「東京府・東京市行政文書」などを見学させていただいた。収蔵庫でも参加者の所属する大学に関する資料をいくつか直接閲覧することができた。その後研修室に戻って、都の公文書移管に関するシステムや、所蔵資料の分類番号の付け方など、具体的な内容についても質疑応答が行われた。

（淑徳大学アーカイヴズ 桜井昭男）

全国大学史資料協議会

東日本部会幹事会議事録

第224回全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録

日 時：10月2日（水）13：30～13：45

場 所：早稲田大学早稲田キャンパス 小野記念講堂

出 席：神奈川大学 國學院大学 淑徳大学

専修大学 帝京大学 東海大学 日本大学 武蔵野美術大学 明治大学 早稲田大学 (オブザーバー参加)

議 題

(1) 2024 年度総会・全国研究会・見学会について

事務局から幹事校の役割分担の確認を行った後、叢書・会報担当校より記録執筆者、叢書・会報の参加記録筆者の依頼などについての説明が行われた。

(2) 次回以降の研究会について

担当校である帝京大学より 12 月の研究会に関する日程ほかについての説明がなされた。また、2025 年 1 月の研究会を担当する淑徳大学、3 月の研究会を担当する神奈川大学より進捗状況の報告がなされた。

(3) その他

事務局より現在、来年度の東日本部会総会の会場を青山学院大学に依頼している旨の報告が行われた。

第 225 回全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録

日 時：12 月 5 日 (木) 13:00 ~ 13:30

会 場：東京学芸大学附属図書館 1 階ラーニングコモンズ・アクティブエリア

出 席：神奈川大学 國學院大学 専修大学 大東文化大学 帝京大学 東海大学 日本大学 武蔵野美術大学 明治大学 立教学院

議 題

(1) 全国研究会の総括

事務局および会計校・東海大学より当日の参加者数、会費・収支などについての説明を行った。

(2) 来年度の東日本部会総会について

事務局より来年度の東日本部会の会場決定およびスケジュール案などについての現状報告が行われ、合意を得た。

(3) 次回以降の研究会について

2025 年 1 月の研究会については、担当校が欠席のため、担当校から事前にいただいていた情報をもとに、日時・会場・スケジュールなどの説明を行った。また、2025 年 3 月の研究会については、担当校である神奈川大学より日時・会場などの説明があり、正式な依頼状を会場校に提出することに対して合意を得た。

(4) その他

- ・研究叢書については、来年度の編集にあたって反訳費用の支出についての説明があり、合意を得た。また、東京農業大学より依頼のあった配布部数の減少については、従来通りで変更しない旨で合意を得た。
- ・今年度の全国役員会で検討事項とされた全国総会・研究会における参加費および日程変更の件については、いくつかの意見が出されたが、最終的には 2025 年 3 月の幹事会までに意見を集約して、2025 年度の東日本部会総会において会員に諮り、その結果をさらに同年度の全国総会で諮るということで合意を得た。
- ・なお、参加費については、東日本部会総会の分も同様に情報交換会の開催可否も含め、今後、検討していくことで合意を得た。
- ・最後に本日の研究会の担当校である帝京大学よりスケジュールなどの説明があった。

第 226 回全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録

日 時：2025 年 1 月 23 日 (木)

13:00 ~ 13:30

場 所：パルテノン多摩 4 階会議室 3・4

出 席：神奈川大学 國學院大学 淑徳大学 専修大学 大東文化大学 東海大学 日本大学 武蔵野美術大学 明治大

学 議 題

- (1) 来年度の東日本部会総会について
事務局および担当校である東海大学より、来年度の東日本部会の会場校（青山学院大学）の決定およびスケジュール案などについての現状報告が行われ、合意を得た。
- (2) 次回以降の研究会について
2025年3月の研究会については、担当校である神奈川大学より日時および学習院大学を会場とする旨などの説明があり、合意を得た。
- (3) 会報および叢書の編集について
担当校より順調に進んでいるとの報告があった。
- (4) その他
 - ・全国大会・研究会の参加費および日程の変更について（検討事項）
会長校の日本大学より、今年度の全国役員会において議論となった点をまとめて報告いただき、幹事校で議論を行い、以下のような合意を得た。
 - ①全国総会と全国研究会（見学も含む）の分離。それにともなう日程の短縮（3日間開催から2日間開催へ）。
 - ②全国総会と全国研究会の開催時期の変更。
 - ①②とも規約（第7条にある、総会を年1回、10月に開催する）を変更することで対応する。情報交換会の今後の方針と年会費を含めた東日本部会の収支バランスについては、別途ワーキンググループで検討の上、3月の幹事会で審議する。

全国大学史資料協議会

東日本部会研究会記録

第140回全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録

日 時：12月5日（木）14：00～16：00

会 場：東京学芸大学 小金井キャンパス

附属図書館 1階 ラーニングコモンズ・アクティブエリア

出 席：お茶の水女子大学 神奈川大学 関東学院大学 國學院大学 聖心女子大学 聖路加国際大学 専修大学 大東文化大学 拓殖大学 多摩美術大学 帝京大学 東海大学 日本大学 法政大学 武蔵野美術大学 明治大学 立教大学 早稲田大学 小川千代子 金光麗湖 北村和夫 古郡信幸 谷嶋美和乃 林慎一郎 山田兼一郎

司 会 堀越峰之氏（帝京大学総合博物館）

講演Ⅰ 「東京学芸大学大学史資料室の設立と展開」 君塚仁彦氏（東京学芸大学大学史資料室副室長、東京学芸大学総合教育科学系学系長・教授）

講演Ⅱ 「東京学芸大学大学史資料室の活動」 牛木純江氏（東京学芸大学大学史資料室専門研究員）

質疑応答

見学会 東京学芸大学大学史資料室・収蔵庫、東京学芸大学附属図書館

〔概要〕東京学芸大学附属図書館で開催された第140回研究会は、全国大学史資料協議会東日本部会長の日本大学・松原太郎氏、続いて東京学芸大学副学長および大学史資料室長の川出圭一氏の挨拶により始まった。研究会は前半が東京学芸大学大学史資料室副室長の君塚仁彦氏、同大学史資料室専門研究員の牛木純江氏による講演、後半は同大学附属図書館および大学史資料室の見学の二部構成で行われた。君塚氏の講演では、東京学芸大学の歴史、大学史資料室の成り立ちや沿革を豊富な写真を使用して紹介したあと、今後の目標などの話がなされた。牛木氏からは、「東京学芸大学大学史資料室の活動」と題した、同室の所蔵資料の紹介のほか、展示や学部教育との連携などの具体的な活動内容に関する講演がなされた。

(専修大学 瀬戸口龍一)

日 時：1 月 23 日（木）14：00～16：00

出席：神奈川大学 國學院大学 淑徳大学

司 会：桜井昭男氏（淑徳大学アーカイブズ）

「パルテノン多摩ミュージアムのリニューアル」

～地域文化の担い手のすそ野を広げる～

〔概要〕 第141回研究会は、パルテノン多摩

(日本大学 松原太郎)

會員名簿（2024年10月現在）

- 1 愛知医科大学 アーカイブズ 医学情

報センター（図書館）

2 愛知大学 東亜同文書院大学記念セン

ター（豊橋研究支援課）

3 青山学院 資料センター

4 大妻女子大学 大妻女子大学博物館

5 お茶の水女子大学 歴史資料館

6 学習院 学習院アーカイブズ

7 神奈川県 大学資料編纂室

8 關東学院 学院史資料室

9 国立音楽大学 校史資料室

10 廖應義塾 福澤研究センター

11 恵泉女学園 史料室

12 皇學館大学 研究開発推進センター

13 國學院大學 校史・学術資産研究センター

14 国際基督教大学 ICU アーカイブズ

15 国士舘 国士舘史資料室

16 国立女性教育会館 情報課

17 駒澤大学 禅文化歴史博物館大学史資料室

18 相模女子大学 アーカイブズ室設置準備室

19 芝浦工業大学 経営企画部企画広報課
図書館

20 自由学園 自由学園資料室

21 淑徳大学 淑徳大学アーカイブズ

22 上智大学 ソフィア・アーカイブズ

23 女子美術大学 歴史資料室

24 成城学園 教育研究所（成城学園百年
史編纂室）

25 聖心女子大学 管理部総務課

26 聖路加國際大學 法人資料編纂室

27 専修大学 大学史資料室

- 28 創価大学 池田大作記念創価教育研究所
- 29 大東文化大学 大東文化歴史資料館（大東アーカイブズ）
- 30 拓殖大学 拓殖アーカイブズ事業室
- 31 玉川大学 教育博物館
- 32 多摩美術大学 大学戦略室 大学史担当
- 33 中央大学 資料館事務室
- 34 津田塾大学 津田梅子資料室
- 35 帝京大学 帝京大学総合博物館
- 36 東海大学 学園史資料センター
- 37 東京経済大学 図書館・史料室
- 38 東京女子大学 大学運営部総務課 大学資料室
- 39 東京電機大学 総務部（企画広報担当）
- 40 東京農業大学 図書館事務課
- 41 東邦大学 額田記念東邦大学資料室（法人本部経営企画部）
- 42 東北学院 東北学院史資料センター
- 43 東北大学 史料館
- 44 東洋英和女学院 史料室
- 45 東洋学園大学 東洋学園史料室
- 46 東洋大学 井上円了哲学センター 井上円了記念博物館
- 47 獨協学園 獨協学園史資料センター
- 48 富山大学 アーカイブズ 総務部アーカイブズ事務室
- 49 名古屋市立大学 大学史資料館（教育研究部学術情報室）
- 50 南山学園 南山アーカイブズ
- 51 日本獣医生命科学大学 附属博物館
- 52 日本女子大学 成瀬記念館
- 53 日本体育大学 図書館
- 54 日本大学 広報部広報課（大学史）
- 55 フェリス女学院 歴史資料館
- 56 法政大学 HOSEI ミュージアム
- 57 北海道大学 大学文書館
- 58 武蔵野美術大学 大学企画グループ教
学企画チーム 大学史史料室
- 59 明海大学 浦安キャンパスメディアセ
ンター（図書館）

- 60 明治学院 歴史資料館
- 61 明治大学 大学史資料センター
- 62 明星学苑 学苑連携推進グループ
- 63 立教学院 立教学院展示館
- 64 立教女学院 資料室
- 65 立教大学 立教学院史資料センター
- 66 立正大学 立正大学文書館
- 67 早稲田大学 早稲田大学歴史館（東伏見アーカイブズ）

以上

機関会員 67・個人会員 39 名・名誉会員 5 名

ご案内

全国大学史資料協議会および同協議会
東日本部会に関するお問い合わせ、入
会申し込みは、下記へご連絡ください。

【明治大学史資料センター】

〒101-8301

東京都千代田区神田駿河台1-1

TEL：03 (3296) 4448

MAIL：history@meiji.ac.jp

【専修大学大学史資料室】

〒102-8275

東京都千代田区神田神保町3-8

TEL：03 (3265) 5879

MAIL：archives@acc.senshu-u.ac.jp

会報編集

【大東文化大学 大東文化歴史資料館】

〒175-0083

東京都板橋区徳丸2-19-10

大東文化大学徳丸研究棟

TEL：03 (5399) 7646